総合的な学習の時間　学習指導案

嬬恋村立干俣小学校　４年生
指導者　木村　正臣

Ⅰ　単元名　交流のわをひろげよう

Ⅱ　単元の価値観

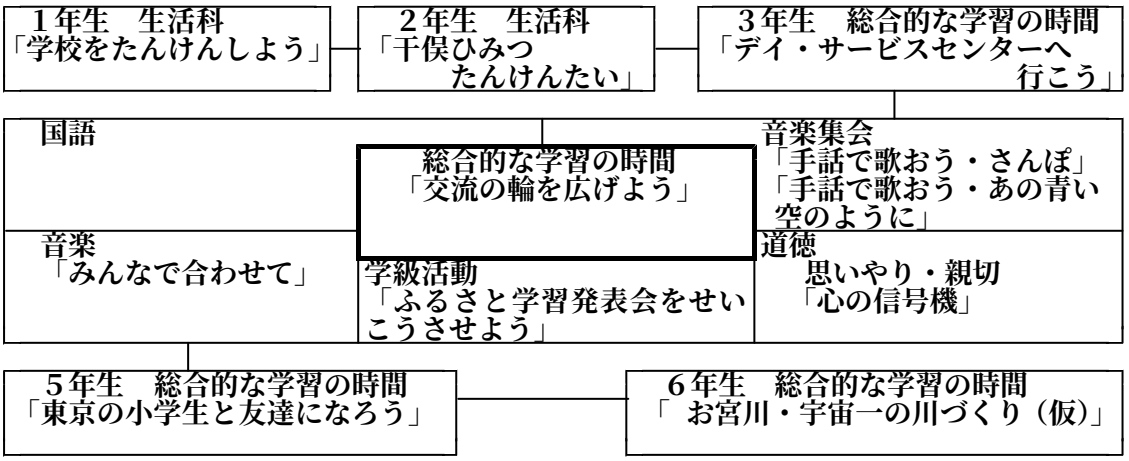
本校では３年前から，４年生が地域の聴覚障害者と交流する学習を行ってきている。本単元「交流のわをひろげよう」は、本校の総合的な学習の時間のテーマ学習であるコミュニケーション学習という系統性から位置付けられている。コミュニケーション学習は、福祉という現代的課題を学校独自の視点からとらえ直している。様々な人との交流から相手の立場を思いやることの大切さを学ぶだけでなく、さらに自分自身を見つめ直し、人とのかかわりの中でたくましく生きる力を身に付けていくことを願っている。３年生での身近なお年寄りとのコミュニケーションから，４年生では聴覚障害者と交流し、５年生では東京の小学生と畑作りを通して交流、６年生では自分たち学習した成果を地域の人たちへ説教的に発信していく活動へと発展していく。

４年生での聴覚障害者との交流では、子どもたちはあらためて、日常のコミュニケーション手段である音声による会話についてふりかえざるおえない。聴覚障害者と交流するために、音声に頼らないコミュニケーションについてどうしたらよいかということから、子どもたちは切実な課題意識をもつ。このことから聴覚障害者とコミュニケーションするために、聴覚障害者や聴覚障害者の生活についてより広く深く追究が深まっていくことができるように、子どもたちを支援していく。

私たちは、言葉の通じない外国人と会話するために思わず顔の表情やジェスチャーを意識したりするが、聴覚障害者との会話でも、手話だけでなく顔の表情や仕草などのジェスチャーも重要な手段である。また、あまり知られていないが、聴覚障害者の会話の手段として口語や筆談も一般的な手段である。口語も筆談も、４年生の子どもたちにとっては親しみやすい手段であろう。その他聴覚障害者に合図を送る手段として、後ろから肩をたたいたり、床やテーブルを鳴らして振動で伝えたりという手段がある。さらに、聴導犬という聴覚障害者を援助する犬が活躍していたり、聴覚障害者のために音以外の手段で知らせる様々な生活必需品がある。

このような聴覚障害者や聴覚障害者の生活について、実際に地域の聴覚障害者と交流することを通して学習できることは、子どもたちにとって貴重な経験である。そのために、本単元では問題解決的な学習過程において多様な評価方法を工夫することを通して、子ども一人一人の自己評価力を高めていくことにより、あらためて自分自身についてふりかえり、学習以前よりもコミュニケーションすることの楽しさや大切さについてわかるようになり、人とのかかわりの中でたくましく生きていく力を身に付けていくことができるようになってほしいと考える。

Ⅲ　系統



Ⅳ　指導方針及び支援

＜かかわる課程＞

○「耳が聞こえない世界ってどんなだろう」では、児童が聴覚障害者の生活に興味・関心が高まるように発問やワークシートなどを工夫し、聴覚障害について自分なりの考えがもてるようにする。

○「本物にかかわる感動体験の場１」では、自己紹介、質問などでコミュニケーションをとり、積極的にコミュニケーションをしたいという気持ちが生まれるようにゲームを取り入れたり、手話通訳士や教師の接し方を見せながら、更に交流していきたいという気持ちが高まるようにする。

○「こんな自分になりたいという目標をきめよう！」では、擬似体験活動を通して、今の自分に足らないものに気づかせ、もっと自由に交流するためにはどうしたらよいのかを考えたり調べたいという気持ちがもてるようになり、いろいろな方法を使って情報収集をしたり整理しながら、自分にとって価値ある目標を立てられるようにする。

＜たかまる過程＞
○「こんな自分になりたいに向けて、学習計画をたてよう」では、自分がたてた目標を無理なく計画的に行えるように、学習を振り返ったりワークシートに記入したりしながら、児童自身が見通しをもった解決ができるようにする。
○「耳が聞こえない世界をたんけんしよう１，２，３」では、課題追究できる場や手段を配慮したり児童が自分の立てた計画に沿って活動できるよう助言したりするとともに、調べたことや理解したことを分かりやすくまとめられるように、ワークシートやチェックシートを工夫する。
○「自分自身をの学びをふりかえる場１」では、自分の調べたことが自信をもって発表できるよう発表の仕方などを指導し、他の友達の発表からよいところを学べるようにする。
○「自分自身をの学びをふりかえる場２」では、中間発表で学んだことを生かして軌道修正したり、自分たちで進められるよう話し合いや練習が余裕をもってできるよう配慮し、自信をもって発表できるようにする。

＜むきあう過程＞
○「今まで追究してきたことを生かして、○○さんを招いて楽しい交流会をひらこう１、２」では、今までの学習を振り返り、どうしたら楽しい交流会になるのか意見交換できる場を設定し、自分たちで計画、運営、準備などができるようにする。
○「本物にかかわる感動体験の場２」では、必要に応じて手助けや助言を行い、児童主体の運営で交流会が成功できるよう見守っていく。

Ⅴ　単元の目標

地域の聴覚障害をもつ人との交流から、人とのふれあいを積極的に深め交流の輪を広げていこうとする態度を育てる。

Ⅵ　評価規準

◎障害をもつ人と楽しく交流するためにどうしたらいいか、自分自身の問題として意欲的に追究していくことが出来る。
◎解決するために自分にとって一番良い方法を見つけ、自分自身の学習活動を見直しながら、見通しをもって問題解決し、総合的に考える力を伸ばしていこうとする。
◎自分の出来ることをいろいろな方法で調べ、学び方を身に付けたり表現力を高めることができる。
◎自分について見つめ直すことにより、いろいろな人とコミュニケーションすることの良さが自分なりにわかり、これからの生活のなかで積極的に交流の輪を広げていこうとする。

※　「交流のわをひろげよう」の評価項目と評価基準については、別紙４ページ参照

Ⅶ　指導計画

※　別紙５ページ～９ページ参照（評価計画のための評価の目的と方法の相関表も添付）

Ⅵ　本時の学習

※　別紙 10 ページ～ 47 ページ参照